
Black or White

花鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Black or White

【Zコード】

N7963X

【作者名】

花鳥

【あらすじ】

ジャンル的にはファンタジー・・・ですが、何でもあります。

銃とか、パソコンもあります。電気工学とか普通に・・・。

完全に中2病なので好みもアレもないと思います。

設定（前書き）

まず、この世界・・・良く分かりません。簡単に言つなら、ファンタジー。悪く言つなら何でもあり。魔法を使える国王様がパソコンとか携帯とかぱりぱり使えちゃうし、いろんな意味でカオスです。びっくりです。それでも良ければ、軽く引き気味に数m離れてお読み下さい。

世界観について

関東地方とよく似た地形をした異世界。4つの国があり、東西南北と統一している感じ。千葉と茨城、東京と神奈川位しかないみたいな感じでお願いします。表現力がないので、4つのうち、一つの国は出せるとしても、他の所は確実に出せない気がするのでご了承下さい。しかし、出したい、小説の中でもう1つ位は・・・！

主人公達はその4つのうちの1つ、東京辺りの場所にいます。国名がリヨン国。王制で、花の都と呼ばれている。その為、観光が盛ん。定期的に交換留学生などを送り、今のところは他国との国交は良好である。・・・今はね。

軍について

リヨン国には2つの軍があり、そのうちの1つは、一般的な感じの自ら志願して入隊して、城の警備や要人の護衛、街の治安維持など、所謂警察的な役割を持つ《軍》。

もう1つは、その《軍》の中から選び抜かれたエリート部隊でその名前を《騎士達の庭》と呼ばれている。《軍》とはあまり仲は良くない模様。

主な任務は、街に入つてくる魔物の討伐や、王の親族の護衛、他国との戦争になつた際に王を守つたり、先陣を切つたり・・・と幅広く、武器の製造や薬品の研究なども請け負つてている。そこは技術部と呼ばれて、万年機械大好き人間達の巣窟とかしている。

その中でも王から最も信頼されている者一人だけが《国王守護職》と言つ《騎士達の庭》の最も最高位に就く事が出来る。《騎士達の庭》は実力があれば上に行けるが、風当たりは強い。そこで挫折して辞めてしまう人もいるとかいないとか・・・。

魔物について

この世界の魔物には主に一種類に分類される。1つは野生で街の外に出ればそこら中にいるようなもの。気性が荒く、度々街や村を襲う時がある。大体街にやって来るのはそれほど強くないもので、『騎士達の庭』の任務対象になる。しかし、森や山の奥などでは滅茶苦茶強い魔獸、ドラゴンやヒッポ、グリフォなどがいる可能性もある為、滅多な事では森や山に近付かないよう呼びかけている。

二つ目は、魔術師や『騎士達の庭』などの人間が使役する召喚獣の類。ちょっとしたお店で買える召喚獣もいる。しかし、それはペツト用で全く戦闘などでは役に立たない愛玩用。

しかし、魔術師や『騎士達の庭』の騎士達が使う召喚獣は、野生の魔物、野生の魔獸を飼い慣らしたりしたものを使う。しかし、それも飼い慣らすには相当な気合いと根性が必要。

召喚獣の普段は宝石のような光る石で、一定の魔力を加える事で具現化する事が出来る。小さな召喚獣だと普段から肩に乗つけたり、頭に乗つけたりして持ち歩く事が出来る。

魔法、属性について

魔法の属性が7つあり、火 水 雷 風 土 閻 光 です。基本的にこの世界の人間が扱えるのは、火 水 土 雷 の4種類です。と言うか、その4種類が一般的で、風 閻 光 はあまり知られていません。し、使える人が限られている感じです。光と闇の属性を持つ人間は、王族などしか発生せず、一般人の光と闇の属性が出てくるのは極めて稀。風属性はリヨン国とのある巫女の一族にしか使えない。その巫女の一族でも風の属性の魔力を持つ子が生まれるのは本当に極稀・・・。

他にも属性に関係なく、物体浮遊魔法などは誰にも出来る魔法もあります。

学校について

小中高一貫のエレベーター式、そしてまさかの高校まで義務教育。正式名称は、リヨン国立小学校、リヨン国立中学校、リヨン国立高等学校。小中高全生徒合わせたら何人いるか分かりません・・・。高校で800人位？敷地面積は・・・多分凄く広いです。魔法で拡張もありかもしません。

他国の国立高校とも連携しながら、世界観についてでも言いましたが、交換留学生などでの交流もやっているようです。

主な行事は、体育祭や聖夜祭、文化祭等々・・・体育祭はクラス対抗戦で優勝なんかしてしまって、クラス全員に単位をプレゼント！

！みたいな感じの事をさらっとやっちゃうスーパー校です。

部活は至つては、普通な感じのモノが多い。剣道部とか、薙刀部とか弓道部、サッカー部・・・芸術方面で行くと美術部だとか、陶芸部だとか。変わり種で召喚獣研究学会、魔術研究部だとかがあります。

授業は、数学、理科に国語、体育や社会等々の他に護身用の魔術や体術などがあります。

因みに、召喚獣の持ち込みは、大きくないものなら可です。

設定（後書き）

・・・こんな所かな？中学生時代の自分の空想を高校で引っ張り出してきたものなので、凄く中々くさいですね！自分で改めて思いました！自分びっくりです！！
まあ、頑張ってみます。

主人公達など（前書き）

キャラ紹介！！

多分、話数追う毎に増えていくと思います。

主人公達など

八神 蓮

7月25日 A型

苦労型の主人公、自分の好みを全体的に押し出して作ったキャラですね。中学時代に作ったキャラを今も愛着が沸きすぎて使つて形です。その頃からこの小説の主軸との子を考えてました（完全に中2病だったんですね…今もですけど）。

髪は橙色、瞳は焦げ茶。高校2年で剣道部主将、もうすぐ部長かな？って感じです。甘党、料理などは普通にこなせる。

母親は病弱で彼が幼い時に亡くなつていて、今は双子の姉と破天荒過ぎる音信不通の父親がいる。因みに父親は嫌い…と言つか苦手。そんな父親は国の重鎮で、昔は城にも足を運んだ事がある。そこで会つた少女に一目惚れ。未だに思い続けている。この物語で運命的な再会をするのは内緒だ。

武器は刀で二刀流。刀の名は白い刀、華月かげつと黒い刀、陽信ひしん（うわあ、完全に痛いよ・・・）だつたんですが、親父が陽信を持つていつたままどつか行つてしまつたんで、今は華月と剣道部素振り用の木刀を代用。華月は12歳ぐらいの時に父親から譲り受けた、と言うか押しつけられた。

姓は母方の名前で、母親は国行く末を占つ巫女の血筋だったとか。

風雅 嵐

5月18日 O型

蓮の幼馴染みにして親友、性格は軽く！出来るだけ軽く！と言つ設定でこの子も中学時代に作ったキャラです。まあ、その設定のままでここまで来たんですが…。中学時代は関西弁のもつと軽すぎてウザイ系にする予定だったんですけどね…。どちらかというと、性格的

にもルックス的もこの子の方が主人公っぽいです。

髪、瞳ともに真っ黒。高校入る前にピアスの穴を開けて父親にボコボコにされたとかされなかつたとか…。軽いが、決して軽薄ではない、軽いだけ。

蓮の双子の姉とお付き合い中、かなり惚れ込んでる。部活はやらず、帰宅部。時々、スケットをしたり、いろんな所で油を売つてゐる。武器は父親から譲り受けた槍、名を雷破らいぱ。雷操る槍と父親が持つていた時から言っていたそうで、色々と曰く付きの噂の多い槍。しかし、魔力を加える事で雷を纏わせる事も可能らしいので、あらがちその噂も曰くも嘘ではないようだ。

志竜 霧也

10月10日 A型

蓮と嵐の父親の後輩にて、蓮達の学校の先輩にもあたる人です。この人も早い段階からキャラが固まつていた人です。コンセプトは、苦労する秀才…です。性格的には蓮とかぶる部分もあるかもですが、ちゃんとキャラ分け出来るように頑張りたいです。

髪は金髪、瞳の色は限りなく黒に近い青。高校生時代は凄く頭がよく、要領もよい。その為、教師達からは面白くないと思われていた。まあ、嫌われていたと言う事ですね。

現在、軽くワーカーホリック気味。国王の遊び相手みたいなものになつてゐるので、胃が痛み氣味。可哀想な人。しかし、国王からの信頼は国王守護職に次いで二番手。仕事人間は伊達じやないです。武器は拳銃、ピストル型と思われる。二丁拳銃。しかし、銃に込める弾は鉛玉ではなく、魔法弾。魔法を自分で精製して、それを銃に込める感じ。時々、自分の魔力が足りない時は鉛玉を使う。召喚獣も使役していく、召喚出来るのはフェニックス。名前はフェニです。

.

.

.

COMING

SOON

八朝紅八黑芙蓉汪李八風紅
神霧花神晶晶芙蓉李神雅花.
花隆桔俊瞳牡丹時葵椿
司梗.

主人公達など（後書き）

考えてみると、オリジキャラの数が多い。これで大丈夫なのだろうか？

第一話（前書き）

自分で考えた初めてのオリジナル小説です。生暖かい田ぐらいで見てください。

第一話

・ ピュピュピュピュ -

「…うーん、眠い…」

まだ寝起きの、半覚醒状態の重い体を引きずりながら、ベッドの小脇にあるはずの田覚まし時計を探す。手探りで時計を探し当て、寝癖の酷い頭を搔く。まだ閉じたような瞼を擦りながら、俺は時計を確認した。

「えーと…」

ただいまの時刻、7時45分…ん? 7時、45分…? そこで完全に俺の目は覚めた。

「まづい…ーーー」

ベッドから飛び起き、素早く身支度を整え、嗚呼…飯を食べてる余裕は全くもつてないだろう。空きつ腹を気合いでやり過ごして、急いで学校のバックを取り、玄関に走る。…やうやく、どんなに急いでても挨拶を忘れちゃいけないみな。

玄関にある、黒い額縁の写真に手を合わせる。

「…母さん」

「今日も元気に、頑張ってきます。

「行つて来ます!」

早く行かないと、完全に遅刻する。でも本当…。

「くそ… 全く間に合ひ氣がしない…」

学校まで走つて20分、ホームルームは8時…うん、不可能かも
しない。そんな気がしてきた。

昨日、夜更かししたのがいけなかつたのか…？ それとも腐れ縁
…違うな。幼馴染み兼親友の話を夜更けまで付き合つていた事が原
因なのか…。両方だらけ。嗚呼…こんな事なら、あの馬鹿に付き合
うんじやなかつた。

「よし、息の根止めよ。会つたらフルボッコだ」

「ゼエ…ゼエ…ギリギリヤーフ…」

学校に着いた時は、ホームルームの始まるチャイムの鳴る2分前、
本当にギリギリで間に合つた。

「おはよー！ 蓮！！ 大丈夫か？ つか、遅刻ギリ…」

これが、俺の幼馴染み、風雅嵐。親同士が同じ職場で働いていて、
小さな頃から一緒にいる時間が殆どだった。

因みに、俺の父さんは《騎士達の庭》と言つ軍
に所属している。その《騎士達の庭》の《国王守護職》と言つ最高
位に就いている。…まあ、うちの父さんが少し、いや…めちゃくち
や難有りなんだけど、それはまあ良いか。今はそれどころじゃない。

「誰のせいだと思つてんだ！！　俺は完全に朝型なんだよ！　夜は寝かせやがれ！　このバカ嵐つ！」

俺が、遅刻しそうになつた原因はこいつだ。そんなこいつに思いつきり蹴りを食らわせてやつた。

「アーティスト！」？

そつと自分の部活道具である竹刀袋を取り出し、その中についた木刀を取り出す。

「嵐・・・覚悟は、良いな？」

満面の笑顔で倒れ込んだ嵐の目の前に立つ。当の本人は、顔面蒼白だ。

「えつ、ちょつ！？ なつ・・・木刀！？ 待つて！ いきなり木刀は止めろって！！ 竹刀とかさ！！ ワンランク下の…」「反・省・し・ろ」「ギャアアアアアアー！！！」

その叫び声は、学校中に響き渡った。

第一話（後書き）

第一話！…書けた！そして懐かしい…。全く魔法出てきてないけど、凄くグダグダだけど…まあ、昔はこんなんだつたな。オリジナル、高校一年ぐらいかな書き始めたの…。凄く凄く懐かしいです。つか、もつと文才がほしい。

第一話（前書き）

やつじの「話一書き起こすって大変ですね！」

第一話

「あーくそ…身体中痛い」

「自業自得」

放課後、嵐の買い物に付き合つため、街の大きな商店街に来た。嵐は、朝方の俺が攻撃がまだ痛むのか、腕や頭を頻りに摩つてている。授業でもあまり集中出来ていよいようだった。・・・少しやり過ぎたかと反省するが、後悔はしない。

「痛いです」

「分かつて、だから買い物に付き合つてやつてんだ」「ひ

「それは感謝してるけど！　お前強いの！　俺の骨が折れそうだつたんだから！！」

「はいはい、それは悪ひござんした」

嵐の言葉を軽く受け流し、人のひしめく商店街を歩きながら、はと考える。じいつは何を買うつもりなんだろうか？

「なあ、何買うの？」

「良つけど、聞いてくれました！－！」

聞くといつぞこくらに満面の笑顔で胸を張つた。狙つてるのか、天然なのか良く分からないが、心底つやい。いつもはそんなハイテンションじゃないだろう…。

「ブレスレット」

「ブレスレット？」

「牡丹にさ一もうすぐ帰つてくるだろ？」

「ああ・・・」

「うか、このハイテンションの理由が分かつた。姉さんが帰つてくれるのか。八神牡丹、俺の双子の姉。この国では交換留学生というのを盛んに行つていて、姉さんもその一人として隣国…だつたけな、に行つてもう半年ちよい。もうすぐ帰国らしい。

その姉さんとこいつ嵐はまあ、付き合つている…。俺は別に構わないし、どちらかと言つと歓迎してゐる。それでテンションが上がつてたなら…。

「まあ、それなら仕方がない、か」

「…何が仕方がないって?」

「何でもない」

「はあ…」

溜息を吐く。一人の女の子が生活するには広すぎるし、悪く言えば狭すぎる部屋。

「彼はまだ…私を覚えているでしょうか?…どうしたら会えるでしょうか」

これは一種の賭けである。自分の可愛い娘と、その思い人を会わせる口実が必要なのだ。やはり、年頃の女の子、しかも一人娘をいつまでもこの城に閉じこめておくのは忍びないし、いつかは外交か何かで外に出なければならない。

しかしながら、まだ危険なのだ。思ひ人にボディーガードになつ

でもう一つ言つのも一つの手。

「…城から出られれば会えるでしょうか?」

「外はちょっと危険だし、兵の守りも薄くなるから…あつ、もうちょっと待つてね? もう少ししたら考えるよ」

「お父様? それは一体どういう…」

「まだ秘密 じゃあ、ちょっと僕は仕事があるからね。部屋に戻るよ」

「分かりました」

悠々と娘の部屋を出て、少し思案する。これならどうにかなるかもしれない。

それはさつき入った情報。その情報によれば、商店街方面に野生が召喚獣かは分からないけど、大量な魔物の目撃情報が…賭けに出るには良い頃合いだらう。

「さてと、霧也? 準備は良いかな

「分かりました。…国王陛下」

第一話（後書き）

改变じゃなくて、改悪です。自分で書いた小説に謝りたい。まあ、頑張ろひ。出来るここまで突っ走ります。

第二回（温故知新）

おおきい・・・いろんな手でHHんどしうつか?

「さーて、どれにすつかな～」

「……」

商店街の洒落たアクセサリーショップに、野郎一人で来るつてどうなんだろうか？ 周りを見渡さば、カップルで来ているのが多数…後は女子一人とか二人組。俺達完全に浮いている気がする。

「～」

そんな事は全く気に留めていない親友は、鼻歌交じりに姉に渡すプレゼントを物色していた。彼女いなし歴[＝]年の数の俺には関係ないか…。そう思えば、最初に恋らしい恋なんてものを作ったのは、十数年前だったような気がする。マセガキと言われてしまえばそんなだけ…。彼女は今元気だらうか？ 城にいた貴族の子だったような気がしている。

父さんの仕事の関係上、よく嵐と共に連れて行つてもらつていた。彼女と会つたのも、それで三人で遊んだのもそれが始まりだ。小学校が始まつてしまつて、もうそれ以来。最後の日には会う約束もした。でも。

「まあ…俺には高根の花だつたし、もう俺の事なんて忘れてるんだろつなか」

貴族の娘さんなんて、一般市民の俺じゃ……全く手が届かない。凄く可愛い子だつたから、もしかしたらもう婚約者とかがいるんだろつ。それの方が可能性がある。いない方がおかしいだろう。

「十九」

「なあ、何溜め息吐いてんの?」

溜息を吐いた俺に、買い物が終わつたのか、綺麗にラッピングされた袋を片手ににやけながら嵐がやつてくる。俺の吐いた溜息に嵐は首を傾げながら訊ねてきた。言う必要はないと自分で判断し、素っ気なく対応した。

「何でもない」

「そうか？なら、買い終わつたから、ゲーセンかなんかで遊んでからかえ……」

と嵐がにこやかに笑つたのも束の間だつた。

「！？」

そう遠くない距離から聞こえる魔物の咆哮。街は通常だと魔物除けの結界が張り巡らされていて、魔物の類は滅多に入つてくる事はない。が、時々、強力な結界を突き破つて入つてくる魔物がいる事はいる。

ମୁଦ୍ରଣ କରିବାର ପାଇଁ

「とりあえず、《ボランティア》は昔からしてるんだし、大丈
夫じゃね？」つか、聞く必要あるか？」

「そうだな……分かつてゐるよな？」風

力まず行きますか

その言葉を合図に、俺達は広場へと駆け出した

第三話（後書き）

もう少ししたら、キャラ紹介に一人一人追加すると思いませう。よろしくお願いします。

第四話（前書き）

戦闘シーン？何それおこ起この？

「うわっ、あっ！…」

「広場に来てみれば、二十数匹の魔物の群れ…いつもは一匹や二匹だったはずなのに。仕方がない…『ボランティア』と称して、魔物相手に修行をしようと言ったのは自分自身だ。

父さんから受けた昔の苦行に比べれば…どうって事はないはず。苦行の話は出来るだけはなしたくはない…一つ言える事は、あれは地獄だった。そして父さんが悪魔だった。その一言に死せる。絶対にもうやりたくない。やるくらいなら、いつそ消えて無くなる。…話が脱線しそぎた。それどころじゃない。

「さつさつと軍の関係者が来る前に片付けて帰るぞ」

「そーだな・・・軍に捕まると簡単に帰れないからな。まあ、高校生で武器持つてる時点で不審だからなあ、俺達」

「そう、一番問題なのは俺達なんだ。今、嵐が黒い槍を取り出し、俺もおもむろに刀袋に手をかける。俺が手に携えていた刀袋の中身は…竹刀、木刀の他。正真正銘父さんから無理矢理渡された白い刀…銘は華月^{かげつ}と言つ。

明らかに高校生が持つものではないと自分でも思う。まあ、その経緯についてはまたいつか説明したい。一応、父さん絡みだと言う事だけは言っておこう。しかし、今はそれよりも田の前に広がっている光景を何とかしなくては。

「ギシャアアアアア…！」

俺達の姿が目に入った魔物達が、一斉にこちらに突進してくる。

横に立っていた嵐が槍を片手に、体当たりをしてきた魔物に向かって蹴りを一発。…刃物持ってるんだからそつちを使えよとか言う深いしつこみは無しだ。嵐がトリックキーな戦い方をするのはいつもの話。

「シャアアアア！」

「蓮、そつち行つた！ 対処頼む！」

そんな事を思つてゐる間に嵐の横をすり抜け、俺の真ん前から魔物が襲いかかってきた。…そんな大事な事は先に言えよな！ こういつ場合…！ 僕に死ねつて言つてるようなもんだぞ！？

「つ…！」

上段に振りかぶり、迫つてきた魔物を斬る。あまり、斬った時の感触がない。さつと幻のように消え、光る石だけが地面に落ちる。

…まさか。

「召喚獣か…？」

「蓮！？ 何か言つた…！」

「いや！ 独り言…！」

「なら良いけど…あつ、ほんとに早く片付けちまおうぜ…今日の晩飯、お袋特製肉じゃがつて言つてたし…食いに来るだろ…！」

背中合わせになつた嵐に少し聞こえていたよつだ。しかし…今は言つ必要はない。しかし、肉じゃがは絶対に食べたい。

「行く！ お邪魔します…！」

「よし、なら早く帰るぞ…！」

今はそんな事考へてる暇は無いな。色々、魔物に引っ掛かるところはあるナビ…。

第四話（後書き）

四話田ー・・・戦闘シーンひとつひとつをひいて書けばいいんですか？誰か私に「教授お願いします。」

第五話（前書き）

書を殴つてゐる状況ですよ（笑）

第五話

「ほりよつー哥イツで終わり……」

「ギシャアアア……」

嵐が最後に残つた一匹を倒し、広場には元の静けさが戻ってきた。安堵のせいか、ほうと一つ溜め息を吐く俺の肩に手を置いてこやかに嵐は笑つた。

「お疲れ やつと片付いたな……」

「そうだな」

一段落して、とりあえず周りの様子を確認する。案の定…やつき考えていた事は的中していたらしく、大小問わずすっかり日が暮れた広場に傾いた陽の光に照らされて輝く石で埋め尽くされていた。

「召喚獣だつたってわけか…こいつして見ると綺麗だと想ひながら、いい迷惑だよなあ」

「同感」

しかも召喚獣。誰かに召喚されたのは明らかだし、それにあの魔物の数、尋常ではなかつた。…もしかして、単独犯じやないつて事か?

「…」

「蓮、どした?」

「いや、何でもない」

「そうか? ならいいや。早く帰つて飯食いたいなあ…腹減つてき

た

「そうだなあ」

つてあれ？ 僕達、こんなにゆづくつ出来ないよな？ …久々に嫌な予感がする。

「嵐…俺達、早く逃げた方がいいよな

「あー」

そう、もうすぐ軍の討伐隊がやつてくる頃合いだろう。の人達、どうも苦手なんだよな。色々聞かれると困る。もしかしたら、犯人扱いされる可能性だつて否めない。

そういうば、広場にいた人達は勝手に避難してくれたみたいだな。

「じゃっ！ 軍が来る前にやつと帰…」

嵐がそう言いかけた。しかし、帰る前に来てほしくないものが、先に到着してしまったようだ。

「貴様…」 こゝは今、立ち入り禁止区間だ…！ 何をしてる…

「やつ…」

終わったな、俺達。

「なんだよ…！ ひょつ、俺達マジでちよー善良な一般市民だつてのつ…！」

俺と蓮は、討伐隊のオッサンに捕まつた。必死に俺は弁解を試み

るが、頭に血が上つてゐるのか全く話を聞けりしなかつた。

「そんな物騒な物を持つた高校生の話など信じらるか！」

弁解はそんな言葉で返される。

つか！今じや、当たり前に高校生武器持つてゐーのー畜生、この
オッサン頭固すぞー！

「それでもせつてなこつて言つてんだろー。」

必死に否定してゐる俺の隣で、蓮ははあと溜め息を吐いた。

「・・・嵐、諦める。どう言つたつてもつ軽く容疑者扱いなんだし
「お前ほんとひこう時、潔すぎだろー。」

ほつんと、親父でも誰でも良いくから、誰か助けてくれよー！

第五話（後書き）

五話です。いきなり大丈夫なの？これ・・・って感じになつてますけど、大丈夫かな？自分でも不安です。主人公、諦め早い・・・。

第六話（前書き）

第六話まできました！！！新主要キャラ登場です！

第六話

「ああ、一緒に来てもうおうがー…」

「だからー…」

「言い訳など聞かん……」

「つぐづぐ……！」

濡れ衣着せられて、そのまま引き下がれない。しかし、蓮は傍観に徹するらしい、もう呆れたような顔をしている。こうなつたら徹底的に戦つてやると、意気込んだ直後。少し遠くの方から、見知った声が聞こえた。

「すみません。隊長殿…彼らは、我ら《騎士達の庭》の関係者です。解放してあげてくれませんか？」

「おっお前は…」

「霧也さん…？」

声の主は、《騎士達の庭》の服を纏い、にこりと微笑んだ。

彼の名は、志竜霧也さん。俺達の親父の後輩にあたり、俺や蓮の兄貴分としてよく遊んでくれていた。優しく強くと、色々出来る万能人間だ。・・・万能過ぎて困る事が多いらしいけど。

「お願いできますか？ 隊長殿」

「くつ…今日のところはこれで終いにしてやる…。」

よく聞くような捨て台詞を吐きながら、軍のオッサンは広場から走り去つていった。他の軍の関係者もそれにつられたようにそそくそと去つていく。

「つたぐー、一度と捕まるかつてのー。」

「…はあ、助かりました。霧也さん、ありがとうございます」

俺の小言は完全に無視して、蓮は霧也さんご礼を言へ。

「いやいや、礼を言うのは俺の方だよ。一人がいなかつたらこの広場にいた人達がどうなつてたか」

「いえ、俺達は何も…」

「そうそう、勝手に逃げてたし」

まあ、勝手に逃げてくれてたからこっちの方が助かつた。避難してくれないと俺達だつて暴れられなかつたし。でも、霧也さんはそつは思つてないらしい。首を横に振る。

「何もしてないわけじゃないじゃないか。毎回いつもやつて助けてくれてるんだし…で、その流れでちょっと相談があるんだけど」

相談？ 霧也さんが俺達に相談…。嫌な予感がちょっとするんだけど、気のせいだと信じたい。蓮も多少顔が引きつっている。

「えつと…相談ですか？」

蓮の言葉に、霧也さんは満面の笑顔で頷いた。

「ああ。国王陛下が、毎回市民を守ってくれている君達に感謝状を出したいから、俺に連れてくるように頼んだんだよ。と言つわけで、城まで来てくれないか？」

「…え」

「はあー？」

ちょっと、何この急展開！？

第六話（後書き）

これってどうなんでしょうつか？あつ、霧也さんのキャラ設定も付け足しておきますね！－これは、どうなんでしょうかね？自分の文才の無さに涙が出てきたりですね・・・。

「おー、どうするよ？ 蓮・・・」「どうするって言つたって」

国王なんて感謝状なんて貰うなんて恐れ多い・・・・。でも、気が付いたら、城の前なんだけど！？巨大的な綺麗な城。昔来た事はあるけれど・・・。

「絶対に何度も来ても慣れないよな」

俺はそんな事を言いながら溜め息を吐くと、霧也さんは苦笑いを浮かべる。そして本当に申し訳なむけつに、俺達に向き直った。

「本当にじめんな、一人とも。国王、言い出したら聞かないんだよ」

霧也さんや俺の父さん、嵐の親父さんは国王陛下と昔馴染みらしい。名前で呼び合つ仲だつたらしいが、父さんが話していた話であつて、俺は全く信用出来ないんだけど。嵐の親父が言つては、『もつと国王としての自覚を持ってば文句は言わないが・・・』だそうだ。いまいち、どんな人なんだか予想が出来ない。でも・・・。

「言い出したら聞かないって言つのは、俺の父さんも変わらないか・・・あの馬鹿、今どこにいるんだか・・・」

俺の父さん、八神俊と言つんだが、極秘任務という名目で出ていつたきり・・・全く帰つてこない。俺の家は母さん名前は八神花と言つ。

その母さんが、数年前に死んでしまって、姉さんが留学中と言つ

事で今は俺一人。まあ、楽だし、家事は普通にこなせるから苦ではないんだけど・・・父さんがいた時は本当に地獄だった。いつだつたか、小さい頃に千尋の谷に突き落とされたり、魔物の巣窟に一人放り込まれたり・・・数えたらきりがない。

破天荒で天の邪鬼、悪逆非道の傍若無人・・・そんな言葉がぴったりの人間だ。しかし、いなければいで人様に迷惑をかけていないかとか、色々と不安になる。

「あのクソ親父、帰つてきたらただじやおかねえ・・・」

「・・・」

理解はしている。子供が親に向かつて放つ言葉じゃない事ぐらいは。でもこれだけは譲れないのだ。

「いいいや、俊さんだつて何か考えがあるんだつて！-！」

「そつそつ- 多分重要な任務に就いているんだと思うんだ！-！」

霧也さんと嵐が必死に宥めよつとはしてくれてる。しかし・・・俺の怒りは收まりそうにない。大事な任務だからと言つて！

「本職の国王守護職を放り出してやる事じゃない！-！」

「・・・」

「はあ・・・」

胸に貯まつた鬱憤を吐きだした蓮は盛大に溜め息を漏らす。てか、どうしたら、破天荒な親父さんから・・・こんな生真面目な人間に育つんだろうか？ 反面教師つて言葉があるが、ここまでまつすぐ育つものか？

「わかんねえ・・・」

俺の言葉に、霧也さんも苦笑しながら頷いてくる。思つてこる事は同じのようだ。

「俺もそう思つよ。・・・まあ、俊さんの話は蓮にも毒だらうから、まずは城内に入らうか」

「やうですね・・・」

霧也さんに促され、城の中へ。謁見の間まで凄く距離があるようだ、疲れるけどじめんなど霧也さんが言つていた。・・・謁見の間まで行く途中、ふとある事を思い出す。

「なあ、蓮
「・・・なんだよ」

・・・さつきのダメージが相当酷いらしい。ヤバいくらい顔が青い。いや、何の為に思い出したんだよ。この暗い蓮の雰囲気を払拭する為だろう！

「昔、親父達のツテでさ、城に来た事あつたよな？」

「ああ・・・あつたけど。それがなんだよ？」

「こいつ、昔つから自分の事になると鈍いよな。鈍感つて言つの？
事の発端は七歳くらいの時か、蓮と共に親父達の仕事場であるこの、城に来た事がある。その時に城にいた同い年か、少し年下くらいの子と出会い遊んだ。こいつの分かりやすい性格の為、俺はすぐにな分かつたんだ。

「あの時に会つた初恋の子に会えるかもって言つてんだよ……」

「つー？」

「はいはい、予想通り。顔も耳も真っ赤っか 本当に分かりやすい。

「ばつ馬鹿！ そんな昔の事なんて！ あつちは覚えてるはずがな
いだろ！？」

茹で蛸のようになりながら、俺に蓮はさう言つて俯き出す。自分で言つて悲しくなったんだろう。当たり前だよなあ・・・当の本人は、その時の事が忘れられなくて、今の今までモテるくせに彼女い
ない歴=歳の数。

「それに・・・あつちは俺の事なんて本当に忘れてるよ
「ネガティブだよなあ、お前」
「血覚はある」

「ありやじゅ・・・。

第七話（後書き）

こんなにネガティブな主人公もあんまりいないですよね？っていうか、ヒロインの子もずっと待ってるんですねｗｗｗ（一話参照）まあ、次回は再会編かな？頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7963x/>

Black or White

2011年11月30日19時49分発行